

健康福祉委員会資料

(健康福祉局関係)

2 請願・陳情の審査

(1) 請願第19号 難聴者の補聴器助成制度の創設に関する陳情

(2) 陳情第79号 加齢性難聴者の補聴器購入に公的助成を求める陳情

資料1 高齢者の難聴と補聴器等について

令和3年3月12日

健康福祉局

1 難聴と補聴器等

○難聴について

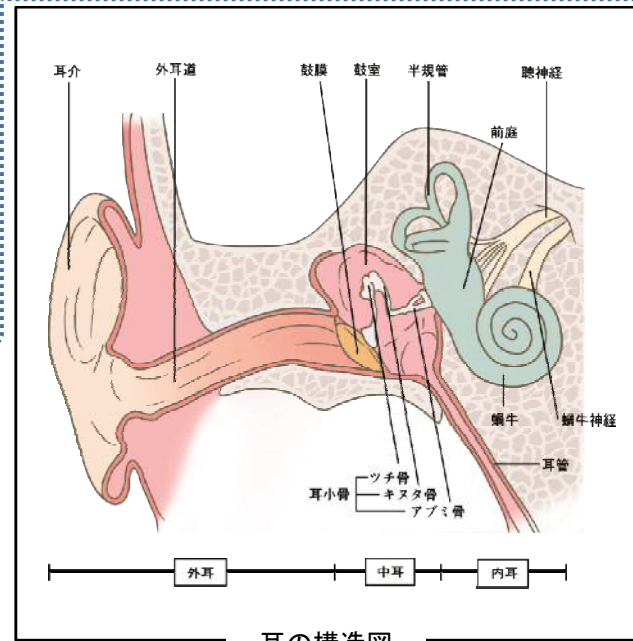
(厚生労働省ホームページから抜粋)

音が耳に入ってから脳に伝わるまでのどこかの段階で障害が起こり、音が聞こえにくい、言葉が聞き取りにくい、あるいはまったく聞こえないといった症状のことをいいます。

耳の構造は、「外耳」（入口から鼓膜までの部分）、「中耳」（鼓膜、耳小骨、鼓室と乳突蜂巣）、「内耳」（さらに奥の蝸牛と三半規管などがある部分）の3つに大きくわかれています。

外耳と中耳は音を伝える役割をしており、内耳は音を感じて脳に伝える役割をしています。これらのどこか、あるいは脳の聴覚中枢に障害が起こると、難聴を発症します。

難聴は、外耳と中耳の障害によって音がうまく伝わらない「伝音難聴」と、内耳や脳に問題があり、音をうまく感じ取れない「感音難聴」の2種類に分けられます。



○聴力の定義について

我が国においては、身体障害者福祉法に基づく身体障害者認定基準により、聴力レベルに応じた身体障害者手帳が交付されます(表1)。またWHOでは、聴力レベルに応じて、4段階の定義がされています(表2)。

表1 身体障害者福祉法に基づく身体障害者障害程度等級表

1級	(なし)
2級	両耳の聴力レベルがそれぞれ100デシベル以上のもの(両耳全ろう)
3級	両耳の聴力レベルが90デシベル以上のもの(耳介に接しなければ大声語を理解しえないもの)
4級	1. 両耳の聴力レベルが80デシベル以上のもの(耳介に接しなければ話声語を理解しえないもの) 2. 両耳による普通話声の最良の語音明瞭度が50%以下のもの
5級	(なし)
6級	1. 両耳の聴力レベルが70デシベル以上のもの(40センチメートル以上の距離で発声されて会話を理解し得ないもの) 2. 一側耳の聴力レベルが90デシベル以上、他側耳の聴力レベルが50デシベル以上のもの

表2 WHOによる定義(日本老年医学会雑誌51巻1号(2014:1)から編)

81デシベル以上	profound impairment (重度難聴)
61~80デシベル	severe (高度難聴)
41~60デシベル	moderate (中度難聴)
26~40デシベル	slight (軽度難聴)

○補聴器について

(日本耳鼻咽喉科学会ホームページから抜粋)

補聴器は、普通の大きさの声で話される会話が聞き取りにくくなったときに、はっきりと聞くための管理医療機器※です。遠く離れた音や特別に小さな声を拡大して聞くものではありません。

補聴器は形の違いだけでなく、機能上もいろいろな種類があります。難聴の程度に応じて、少し聞き取りにくい軽い難聴からほとんど声が聞き取れない高度の難聴用まであります。また、主に使う場所が家庭の場合、騒音のある戸外の場合、パーティなど大勢の人の声がある場合などで必要な機能を備えた種類があります。価格には大きな開きがありますが、高ければ必ずしもよいというものではありません。正しく調整されているかどうか重要です。

※管理医療機器

医薬品医療機器等法により、補聴器も管理医療機器に分類が変更された。管理医療機器を販売する場合、営業所の管理者の届出が必要となる。管理医療機器は医療機器のリスク分類(副作用・機能障害を生じた場合の人の生命・健康に対するリスクの大きさ別に3つに分類)の中で、クラスIIの「リスクが比較的低い」に分類されている。

○専門医の診断と個人ごとの細かい調整

(日本耳鼻咽喉科学会ホームページから抜粋)

自分自身や家族の判断で、補聴器が必要か、効果があるかを正しく決めることはできません。聴覚検査の結果、日常の音の環境とそれぞれの人にとって重要な会話の関係から、総合的に判断することが必要です。聴力障害と補聴器の両方を熟知した補聴器相談医※の診察を受けてください。

聴力障害の状態には、小さい会話が聞こえない、会話を誤って聞く、音が不快に聞こえるなどの点で個人差があります。簡単な聴力検査だけではその人のことばの聞こえ方はわかりません。ことばがどのように聞き取れているかを調べることで、補聴器を使う場合にどこまで聞こえるか、どのような限界があるかを予測できます。

難聴疾患のために障害を受けた耳の残された聴覚を使って、ことばを聞き分ける能力を最大限に発揮させることが、補聴器を最も効果的に使用できる重要な要素ですから、補聴器相談医の診断に基づいて調整をしてもらうことが必要です。

※補聴器相談医

日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医の中で、福祉医療・成人老年委員会が作成した講習カリキュラムのすべてを履修し、認定された者。補聴器相談医制度は、難聴者がそのコミュニケーション障害に有効な補聴器を適正に選択して使用できるように対応することを目的としている。

○加齢性難聴の特徴と対処

(日本老年医学会雑誌51巻1号(2014:1)から抜粋)

老人性難聴の特徴は単に「音」に対する聴力が低下するだけではない。「言葉」に対する聴力が低下するのが大きな特徴である。感度の悪くなった蝸牛を通して音情報を中枢に送らなくてはならない。そのために、現在最も簡便な方法は補聴器を利用することであろう。

高齢者に補聴器を勧める場合は、以下の点をあらかじめ伝えて理解してもらうことが重要である。

- ① 現在の難聴は、補聴器によって音を大きくすれば完全に解決するわけではないこと。
- ② 少しずつ時間をかけて複数回の調節が必要であること。
- ③ 補聴器からの音に順応させるために自らが使いこなすための努力をしなくてはならないこと。

○集団補聴システムについて

(厚生労働省令和元年度障害者総合福祉推進事業 集団補聴システムの普及実態に関する調査研究報告書から抜粋)

難聴者は周囲の音環境や雑音によりことばの聞き取りが阻害されることがある。これを改善するために、話者につけたマイクロホン（あるいは音響機器）から補聴器や耳に直接的に音声を入力する機器の総称である。なお集団補聴システムには、ヒアリングループ式、ワイヤレス（FM）式、赤外線式等の種類がある。

○ヒアリングループ（磁気ループ）について

(平成30年度全国厚生労働省関係部局長会議資料から抜粋)

劇場や講堂、体育館などの床や運動場にアンテナ線をあらかじめ敷設もしくは床上に事前に敷設することで、アンテナ線に囲まれた範囲の難聴者の補聴器や人工内耳に、目的の音声だけをクリアに届けることができる設備。周りの騒音、雑音に邪魔されず、目的の音・音声だけを正確に聞き取ることができる。

2 国の動向等

○国の動向

- 平成27年厚生労働省策定の認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）では、認知症の危険因子の一つに難聴をあげています。
- 聴覚障害の補正による認知機能低下の予防効果を検証するための研究を平成30年度から3か年計画で実施しています。

○補聴器購入助成に関する他都市の状況：すべての政令指定都市において助成制度なし

3 本市の状況

○令和元年度川崎市高齢者実態調査（%）：一般高齢者／要介護・要支援認定者（無回答を除く）

問：耳はどの程度聞こえますか。

	補聴器なしで普通に聞こえる	大声または補聴器をつけて普通に聞こえる	補聴器をつけているが聞こえにくい、あまり聞こえない	ほとんど聞こえない
65～69歳	95.2／87.4	2.7／5.5	0.5／1.9	0.3／1.0
70～74歳	92.3／84.3	4.0／9.3	1.2／1.7	0.4／0.8
75～79歳	87.8／79.0	6.1／11.2	2.3／3.7	0.8／2.1
80～84歳	81.2／71.8	11.3／17.3	3.2／4.5	0.8／2.0
85～89歳	69.8／59.8	16.7／24.1	7.5／8.2	2.0／3.2
90歳以上	57.2／45.5	25.0／32.6	10.4／12.0	3.3／5.9

○補聴器の助成制度

聴覚障害による身体障害者手帳を交付されている方に対して、補装具として補聴器を支給しています。

- 身体障害者手帳を持っている18歳以上の方への支給件数：341件（平成31年度）

○補聴器に関する相談対応

- 補聴器相談医：55人（日本耳鼻咽喉科学会補聴器相談医名簿神奈川地方部会2020年5月）

- 障害者更生相談所

- ・ 補聴器交付判定（身体障害者手帳に該当する市民が対象）
- ・ 補聴器修理・適合相談（補聴器を装着している市民が対象）
言語聴覚士、ケースワーカー、補聴器業者等で相談に応じ、交付適合チェック、装着指導、管理指導、修理等を実施しています。
- ・ 聞こえと補聴器のなんでも相談会
更生相談所外の会場を使用して、補聴器を装着していない市民をも対象として、補聴器や聞こえなどの相談を受付けています。

- 聴覚障害者情報文化センター

耳の聞こえに悩んでいる方や、聞こえないことによる生活の困りごと、補聴器についてなど、聞こえに関してお悩みの方のどのような相談にも応じています。（身体障害者手帳をお持ちでない方の相談にも応じます。）

定期的に「補聴器とコミュニケーションの講座」を開催し、聞こえや補聴器に関する説明や相談にも応じています。

- 川崎市耳鼻咽喉科医会

(川崎市医師会ホームページから抜粋)

「耳の日」に合わせて神奈川県地方部会が「難聴と補聴器の相談会」という無料相談会を開催しています。医会のメンバーもこの相談会に積極的に協力し、難聴について専門家としてわかりやすく解説したり、補聴器の有用性、活用の仕方について説明して、相談に応じています。

○ヒアリングループ（磁気ループ）の本市公共施設における設置状況：20か所（令和2年3月末）

○特定健診について

国の基準に基づき、各医療保険者による実施が義務付けられており、40歳以上の方を対象として、生活習慣病を発症するリスクの高い方を発見し、生活習慣の改善を支援することを目的として実施されています。また本市では、国民健康保険の被保険者を対象（約16万人）に、特定健診を実施しています。

4 国への要望について（令和2年9月）「21大都市高齢者福祉・高齢者医療主管課長会議」

「人とのコミュニケーションは、認知症予防の有効な手段の一つと考えられることから、まずは、研究結果を早期に取りまとめ、医学的エビデンスを踏まえたうえで、認知症予防の効果が認められる場合には、補聴器購入に係る全国一律の公的補助制度の創設を要望します。」

5 本市の考え方

- ・ 難聴者の補聴器購入助成制度については、全国一律の基準で実施されることが望ましいことから、引き続き、国に対して要望をするとともに、補聴器相談医等の相談先について、周知に努めてまいります。
- ・ 公共施設におけるヒアリングループ等集団補聴システムの設置については、時代や施設状況に合わせた設備が適切に設置されるよう、施設運営者に促してまいります。
- ・ 特定健診は、生活習慣病の予防を目的としており、「聴力」と生活習慣病との関連が明らかではないことなどから、現時点で「聴力検査」の追加は難しいものと考えます。